

熊本地震から5年

全壊・大規模半壊の5割(23カ寺)が再建

上棟式行つた浄福寺、解体修復工事完了した泰養寺を訪ねる

2016年4月14日、16日と2度にわたって最大震度7を記録した熊本地震から5年。熊本教区で本堂全壊、大規模半壊した寺院は46カ寺に及んだが、現在までに23カ寺が修復を終え、他の被災寺院も再建、修復計画に取り組んでいる。このうち今年3月6日に本堂上棟式を行つた熊本市東区の浄福寺(浄住護雄住職、写真左)と、昨年8月に解体修復工事を完了した熊本市南区の泰養寺(木尾文人住職、写真下)を訪ね、この5年の歩みを聞いた。



本堂が全壊した浄福寺の浄住住職は、「門徒の多くも全壊の被害を受ける中で、私の方から本堂の再建を口にするにはできなかった」と振り返る。

それが3年目の2018年、門徒たちから再建の話が始まり、同年末に全門徒を対象にアンケートを実施した。そこで3分の2の賛同を得たことから再建委員会が発足した。資金は、宗派・たすけあい運動募金などの全国から寄せられた義援金と、同寺護持会の預金、地震保険を原資とし、不足分を門徒に寄付を募った。



泰養寺のある熊本市南区川尻地区は液状化現象が発生し、同寺は本堂が西に14度傾斜し、全壊と認定された。外見からは使用できなくなったが、いつ倒壊するかわからない危険な状況だった。

地震の3カ月後、前門さまご夫妻が同寺を見舞われた。木尾住職は「前門さまご夫妻が、集まった門徒たちに丁寧に励ましのお言葉をかけてくださったことで、本堂を修復しようという機運が一気に高まった」と振り返る。

費用は、義援金、宗派の災害対策金庫からの借り入れ、そして門信徒からの寄付を充てた。2017年、本堂を解体して更地にし、地面に8メートルの杭を90本打ち込んで耐震地盤を作った。そして、本堂の木材の多くを再

利用し、使えない箇所を補って再建するという大規模修復工事を施し、昨年8月に完成した。

11月には落成慶讃法要を営む予定だったが、コロナ禍のために延期。そして1月の報恩講も中止したため、門徒への披露はまだ行われていない。

木尾住職は「修復を終えた本堂におられる如来さまに5年ぶりにお給仕し、おつとめをすることができた時は感無量だった。早くコロナが収束し、本堂に門信徒の方々が集まれる日がやってきてほしい」と語った。

再建委員会副委員長らのボランティアの皆を務める光岡和隆さんさんに助けていただき心強かった。復旧はもつと時間がかかると思っていたが、門信徒の皆さまの懇念の力でここまでこぎ着けることができた」と感慨深げに語った。

浄住住職は「本山かに語った。